

御移転の真実を語る資料：遷祖式を中心として

著者	関根 透
雑誌名	鶴見大学仏教文化研究所紀要
号	17
ページ	23-33
発行年	2012-03
URL	http://doi.org/10.24791/00000376



御移転の真実を語る資料——遷祖式を中心として

鶴見大学仏教文化研究所所員 関根 透

先ほどご紹介いただきました「関根」です。私は木村学長や納富先生とは違いまして、仏教には門外漢です。現在、医療倫理を調べている歯学部教師であることを念頭におきまして、私の話を聞いていただければ幸いです。また、素人の見方も感じとっていただきたいと思います。本日は、今から百年前の明治四十四年十一月四日・五日・六日の三日間の写真を示しつつ、当時の新聞記事を中心に遷祖式を説明します。その盛況な遷祖式の雰囲気を感じていただければありがたいです。当時の總持寺の賑わいは、石原裕次郎の十三回忌を彷彿させるような混雑でした。多くの善男善女が正装して鶴見が丘に集まり、總持寺が当時の日本人の「心の支え」になっていたことが彷彿できます。テレビや映画もない時代で娯楽が少なかつたとはいえ、やはり總持寺が人々の「心の支え」になっていたからこそ、これだけの賑わいになったと思います。今再び、總持寺が日本人の「心の支え」になるように願いつつ、これから一生懸命お話させていただきます。

それでは、早速にスライドをお願いします。これからスライドがたくさん出てまいりますので、皆さん方は配布資料を参照しながら、聞いていただければ幸いです。

まず、このスライドの絵葉書は、本日お見えになっております前学長・高崎直道先生のお伴をして、能登の總持寺祖院を訪れた時に入手した絵葉書の表紙です。今回の発表のために、先月、能登の總持寺祖院へ資料収集のために行つてまいりましたが、門前町の街並は地震のため一変していました。しかし、總持寺の伽藍は外見上、ほとんど変わっ

ていないように見えました。次のスライドは、總持寺祖院の仏殿（本堂）の工事中の写真です。青いシートの部分が五十センチぐらい上げられた床で、その下には崩れた土砂が入っていました。他にも工事中の場所があり、地震の痕跡がまだ境内に残っていました。このスライドは、古い三松園という山門の写真です。現在と全く同じで、この山門を祖院話の在田證宗師と川口亮純師の両師（等）が、明治四十四年十月三十日に二祖の御真牌等を奉安して鶴見總持寺に向けて出立いたしました。実際に御真牌を持って出立したかどうかは、わかりません。お二人だけで、たくさんの御真牌を持って行ける量ではないからです。これから『大本山鶴見總持寺団体参拝記録』が出てまいります。その文章から推測してお二人だけで御真牌等を護持して神奈川県最乗寺まで旅するのは無理かと思えます。また、当然重要な御真牌が祖院から出るわけですから記録もある筈です。しかし、私には真相がわかりません。次のスライドをお願いいたします。この『東京朝日新聞』には「三十日に能登を出た」とあり、「十一月四日に松田停車場に最乗寺の僧侶がお二人を迎え、御真牌と共に行列を組んで大雄山に上山した」と伝えていきます。しかし、国会図書館の『北國新聞』を丹念に調べてまいりますと、「十月二十六日に能登から御真牌が大雄山最乗寺に届いている」とも書かれています。また『中外日報』は十一月三日に出立、『横浜貿易新報』は二百名の僧侶と出立したとあります。

さて、能登では参拝団一行が組織され、団体一行は能登の櫛比村（總持寺）を出発し、六水を経由して七尾の靈泉寺に集合し、鶴見へ向います。スライドをお願いいたします。これは団体の鉄道経路図です。上段の部分が見えませんが、当時は、まだ穴水には駅がございませんでした。七尾では他のグループと合流し、金沢、米原を経て名古屋に着きます。名古屋では萬松寺に寄ります。そこで、鶴見總持寺仏殿の工事現場を見学し、翌日、東海道線で豊橋、静岡を経由して御殿場線の松田駅から国府津駅に直行します。本来なら大雄山最乗寺に登る予定でしたが、列車が遅れて寄れませんでした。初めて、石川素童禪師さんが独任四世に当選して祖院に帰山した時は、信越線を通って能登の總持寺へ入山しております。

このスライドは先月、祖院で撮らせてもらった『大本山鶴見団体参拝記録』の表紙と内部です。大変きれいな文字で書かれ、私でも読めます。一番端が抜けていますけども、「靈泉寺」という文字が見えます。団体一行はこの靈泉寺に一度集合して出立しています。この記録によりますと、穴水で集まり、更に七尾で団体一行全員が集合いたします。金沢駅では、駅長がお迎えしています。ここでまた点呼が行われて、米原駅で乗り換えて、名古屋へ向かっています。名古屋駅で全員下車します。名古屋では萬松寺における鶴見總持寺仏殿の工事現場を見学し、熱田神宮、名古屋城なども訪れています。その後、東海道線を上り、本来だったら、御殿場線の松田駅で降り、大雄山最乗寺に登る予定でした。しかし、列車が遅れ、降りることができませんでした。五日の朝四時頃、国府津駅へ黒煙を出しながら入線した光景を、当時の新聞『横浜貿易新報』が伝えていています。国府津駅では、大雄山最乗寺から行列を組んで、御真牌を護持してきた在田・川口両師一行らを待機していました。また、石川素童禅師らは国府津駅前の案下所で前日から待つておりました。二祖の御真牌等を護持して乗車しました石川禅師らの特別臨時列車と参拝団の団体列車とを連結して鶴見へ向けて発車しました。今、『参拝団記録』を、少しずつ丹念に読んでいます。

次のスライドは、現在の穴水駅です。当時は穴水駅がありませんでした。これから十一月四日、五日、六日の穆山禅師さんのお葬式までを説明しますが、まず、参拝団一行の道順を辿ってみたいと思います。現在、輪島駅は列車は走っておりません。「道の駅」になっています。穴水が発発で金沢方面へ向かいます。次のスライドをお願いします。これは現在の名古屋・萬松寺前の賑やかな「万松寺商店街」です。この萬松寺に団体一行は寄っています。このスライドは当時の萬松寺で、上の方には「名古屋萬松寺ニ於ケル仏殿ノ起工式」と説明されています。この起工式後の總持寺仏殿の工事風景を、団体の皆さんは見学し、名古屋の丁寧寺、萬松寺、近くの旅館などに分宿して泊まり、熱田神宮、名古屋城など名古屋市内を遊覧観光しています。

(総会司会・関根先生の御発表の途中でございますけれども、少々お時間をいただきたいと思ひます。現在、私の時計でございますと、電波時計、二時四十五分でございます。間もなく二時四十六分になります。ちょうど三か月前のこの日、この時間に東北地方を中心とした大震災が起り、多数の方が亡くなられました。その方々のご冥福を祈り、黙禱を捧げたいと思ひます。どうぞご起立ください。

東日本大震災により、命を落とされた方に。「黙禱」。

おなおりください。どうもありがとうございました。では、関根先生、よろしくお願ひいたします。)

それでは、名古屋の萬松寺から国府津駅までの団体一行の経路を辿つてみます。名古屋を出発し、豊橋駅と静岡駅でお弁当を買つています。また丹那トンネルが来ていませんので、御殿場線を通り松田駅で下車する予定でした。しかし、予定通りに参りませんでした。本来なら大雄山最乗寺に寄り、在田・川口両師や御真牌と一緒に国府津駅へ行列をなして向かう予定でした。先述の新聞記事のように四日には、在田証宗師と川口亮純師が松田駅に着いております。松田駅までお二人を最乗寺さんがお迎えに来ます。人力車等でお迎え、御真牌を奉安して、一行は悪路を通つて最乗寺に上がつています。最乗寺では盛大な歓迎の儀式が営まれます。その時、お二人が今上陛下御尊牌や御真龕に安置した御真牌を本当に持つていったか、それともすでにこれらが到着していたかの疑問が残ります。『読売新聞』は、松田駅から最乗寺までの行列が詳しく報道されています。このスライドは当時の最乗寺です。次のスライドをお願ひします。これは最乗寺の住職である石川素童禪師さんが中央におり、最乗寺境内で撮つた写真です。次のスライドは『東京朝日新聞』の記事で、「能登の別院より御祖の御真龕等を奉じて松田駅に到着し、大雄山で大衆四來の僧侶が歓迎した」と報じています。この記事によりますと、石川禪師猊下が大雄山に上つて国府津駅まで行列に加わつてきたように読めますが、それは誤りかと思ひます。次のスライドは老杉に囲まれた大雄山最乗寺参道入口です。次

のスライドは明治四十四年十一月四日の大雄山最乗寺における儀式の模様をまとめたものです。御真龕（御真牌を安置するケース）等が着きますと、全山の僧侶が出迎え、回向し、貫首代理の名古屋幹徳寺住職・平野大仙師が御真龕を回向されています。夜七時頃に最乗寺紀綱の荻須梅信師の先導により、十六人の屈強の僧侶が今上陛下の御尊牌などを担いで出立します。担ぐような大きなものなので、『北國新聞』が四日以前に最乗寺へ着いたと報じていますが、その可能性も考えられます。行列は今上陛下の御尊牌、太祖常済大師、高祖承陽大師の御真牌等が続き、平野大仙貫首代理、在田師と川口師の両師、大雄講の信徒三百人が旗、釣香炉、高張提灯を掲げ、法螺、錫杖を轟かして老杉の夜陰の中を下って行きました。夜中に通ったわけです。『読売新聞』は、夜の行列が通るのは、非常に珍しいといっているので、わざわざ記者を松田駅から人力車を飛ばして岩下旅館へ送っています。岩下旅館は現在もありますが、当時の状況は知りませんでした。このスライドは「今上陛下の御尊牌」と言われる写真です。その次の新聞記事は先ほどの記事を大きくした部分です。最乗寺を出発した行列の様子が、詳しく国府津駅まで書かれています。最乗寺を夜八時に荻須梅信師に先導されて出発いたします。このスライドは最乗寺から国府津駅までの行列の概略を示したものです。次のスライドは当時の大雄町内の沿道地図で、左下の二軒目が鈴木宅です。次のスライドは『神奈川新聞』の前身である『横浜貿易新報』の夜中の最乗寺における盛大な歓送迎会の様子を伝える記事です。最乗寺の仁王門ですが、当時は「仁王門」と呼ばれていたようです。仁王門の近くには「鈴木家」があり、現在、大きな門が残っています。一行は代官であった鈴木善兵衛宅で小休止します。中央左の岩下館を曲がると、現在の大雄山線の終点・大雄山駅に至ります。次の古い写真の「大真橋」を渡り、大雄山講の信徒三百人が掲げる旗とか、高張提灯とかと共に大行列は進んで参ります。そして坂本を通り、当時の足柄尋常高等小学校で休息いたします。その小学校の講堂に御真龕等を安置し、塚原の信者や住民が手を合わせにやってきます。中村藤蔵宅前にも止まった後、足柄上郡と下郡の境で最乗寺関係者とお別れします。その後、小田原街道に入り、小田原の街に入りますと、商店は明かりを灯して一行を迎え、真田三

吉宅の「紀三」では緋毛氈を敷いて、夜中の三時というのに家族一同が正装してお迎えします。小田原図書館所蔵の古い地図を見ますと、「紀三」が載っており、ここで休息します。現在は、その場所は道路になっています。行列は五百人以上に膨れ上がり、国府津駅までまいます。人が増えたので、途中で警察署長が加わり、警護にあたるという熱狂ぶりでした。詳しいことは、来週の月曜日（六月十三日）に生涯教育で一時間半に亘って説明します。これからも写真をいっぱい見ながら説明していきたいと思っています。

さて、それでは次のスライドをお願いします。これは「国府津駅から鶴見駅まで」の様子の概略です。国府津駅前では、紫雲台石川素童猊下が蔦屋を案下所として待っていますから、先ほどの新聞記事とは違っています。このスライドは当時の国府津停車場です。駅前には日露戦争頃ですので、馬が繋がれています。次のスライドは駅前の光景で、待合所があり、こんな雰囲気でした。更に、次のスライドは国府津駅前の旅館「蔦屋」のことが載っている新聞記事です。次の二つのスライドは国府津駅前の蔦屋本館と別館です。紫雲台猊下の案下所は、蔦屋別館が当てられていたようです。玄関は後から増設された本館で、今はマンションになっており、面影は全くありません。石川禅師さんは蔦屋の本館に宿泊しています。次のスライドは、『東京朝日新聞』に載っている「最乗寺から鶴見の遷祖式まで」の詳しい十一月六日の記事です。次のスライドが当時の国府津駅前の配置図で、黄色の部分が蔦屋です。現在は当時の様子を知る人はいませんでした。その次のスライドをお願いします。これは『跳籠』の記事です。ここに時間が書いてありますが、最初に二宮駅に停まって、一行を大応寺さんたちがお迎えします。その次のスライドは、大園玄致禅師石川素童貫首のお姿でございます。次のスライドの地図に示した緑色の線が大雄山から鶴見駅までの部分です。この線を特別臨時列車が通りました。国府津駅を出発しますと、特別臨時列車は二宮駅で禅師さんらは降り、ホームで大応寺や関係の方々にご挨拶をし、また茅ヶ崎駅でも降りて、海前寺の送迎関係者にご挨拶します。更に、程ヶ谷駅、神奈川駅でもご挨拶をしています。見にくいかもしれませんが、東京駅はまだこの路線図にはありません。現在の横

浜駅もなく、平沼駅と書いてあります。そして「横浜」と書いてある駅は、現在の桜木町駅です。このスライドは六郷川を渡る列車で、明治四十五年頃に東海道線を行っていた列車です。これは大宮の鉄道博物館では、全く資料を手でできませんでしたので、他の図書館でコピーした写真です。このような型の団体列車が山北方面から黒煙を吐きながらやってきたわけです。これが団体列車と同型の列車だと思えます。この列車と連結して特別臨時列車の中央一等車に御真龕等を安置し、石川禅師さんらが乗車します。先ほど納富先生のお話に出て参りました栗山泰音さんも一緒に乗りになり、七時四十六分頃に国府津駅を発車しました。実は、これより先に第一陣列車が三十分に出発して、その後、一、二回列車が国府津駅から発車しているらしいです。そんなに国府津駅に列車を置く場所があったのかどうか、不思議でもありますので、見てきました。当時の地図から推測して、置けそうといえは置けそうな感じもします。国府津駅の駅員たちは、「大変な慌ただしさで、十五分、二十分おきに発車する忙しさで、駅員は目の回る有様だった」と、『横浜貿易新報』は伝えていいます。国府津駅を八時前に発車し、二宮駅に停まります。その当時の明治四十四年九月の「旅行案内」という時刻表を国会図書館で入手しました。次のスライドがその表紙です。各停車駅では関係寺院や信徒さんたちが大歓迎をします。茅ヶ崎、大船、程ヶ谷、神奈川駅に約五分ずつ停車します。途中では、列車に「大変目出度いことだと言って、お賽銭を投げる人、列車に手を合わせる人がいた」と報道されています。このスライドは大正元年の「国府津横浜新橋間」の列車時刻表です。国府津鶴見間を約二時間かかっています。次のスライドは『跳龍』の記事です。各駅にお迎えした寺院名などに赤で傍線を附してあります。次のスライドは茅ヶ崎駅で禅師さんたちを送迎した海前寺の山門辺りです。茅ヶ崎駅で送迎した海前寺さんも寄りましたら、若い住職さんが『海前寺史』をもって説明してくれましたが、全く当日のことは記載がなく、わからないとのことでした。程ヶ谷駅では天徳院さんが迎えてくれましたが、大戦の時に全焼しており、全くわかりませんとのことでした。次のスライドをお願いします。これは神奈川駅で迎えに出た本覚寺さんの明治末期の鳥瞰図です。当日の話ではありませんが、

神奈川駅と横浜駅の話、なぜ横浜駅が残って神奈川駅が廃止されたかの経緯なども話してくれましたが、遷祖式当日のことは知りませんでした。京浜急行の神奈川駅は現在もありません。

では、次のスライドをお願いします。これは鶴見駅西口の絵葉書です。次のスライドをお願いします。これは団体一行が鶴見駅に到着した様子が書かれている『大本山鶴見団体参拝記録』の一部です。大雄山参拝の予定も書かれており、終わり方には、鶴見到着となっております。この写真は何処かわかりませんが、遷祖式に加わった群衆の姿だと思えます。旗が立っている賑わいなので、鶴見界限ではないかと思えます。このスライドも『参拝記録』の記事で、大きなイルミネーションで飾られた門のことが記されています。

これから總持寺における遷祖式の様子を説明します。これは總持寺の準備風景を示したスライドです。總持寺は遷祖式のために準備万端を整えてきました。早朝二時の暁天から全山の僧侶が黒田鉄巖師の指導の下、朝課を済まし準備に入りました。永平寺貫主・森田悟由師も、すでに成願寺に案内され、待機していました。そろそろ着く頃には、僧侶の皆さんは参道に出て石川禪師猊下の大行列をお待ちになっています。先導係の黒田師は鶴見駅東口へ出向き、馬や馬車や人足をそこに待機させています。その次のスライドをお願いします。ここには鶴見駅から放光堂までの流れを示したスライドです。予定より少し遅れて、鶴見駅に石川禪師らに護持された今上陛下御尊牌、両宗祖の御真牌などが到着しました。行列は駅前から東海道を迂回して鶴見ヶ丘へ行くのですから、東口に出たわけです。鶴見駅東口を出ますと、大きな歓迎の門があり、そこを潜って踏切を渡り總持寺境内に入ります。次のスライドをお願いします。これは『大本山鶴見団体参拝記録』の「遷祖式奉行実況」の部分です。放光堂には、石川禪師さん一行より早く、御真龕等が運ばれ、安置されました。以後、總持寺境内の賑わいの写真が続きます。大きなイルミネーションが飾られた飯の三松関があります。これは新聞に掲載された写真です。その次のスライドは、当日に總持寺で販売された絵葉書の写真で、右上には朱色の記念スタンプ「44・11・5」が押してあります。下には「遷祖式、上棟式、西有穆山

師茶毘式」の文字が見えます。次のスライドをお願いします。これも絵葉書です。このアーチ型の大門には、桐の紋と巴紋とが交差した旗があり、その下を一行は通ります。その次のスライドは、大門の一部を大きくした写真で、前と同じ場所です。たくさんの人で大混雑している状態がわかるかと思えます。汚れた写真で見難いかもしれませんが、当時の總持寺が如何に人々の心の支えになっていたかを感じ取っていただければ幸いです。次のスライドをお願いします。中央の烏帽子をかぶり、傘の下の僧侶が石川素童禪師さんで、十二名の役僧を従えています。もうこの頃には、行列の先頭は放光堂に着いており、放光堂はシーンと静まりかえっていたようです。禪師さんご一行は一時間程かけて、鶴見駅から放光堂に入ります。次のスライドは、当時の善男善女の姿で、皆さんは正装してやってきています。当時の鶴見の閑静な場所を考えれば、想像を絶した人々が詰めかけたわけですね。その時の雰囲気も味わっていただければ幸いです。次のスライドをお願いします。これが、その時の様子を記した『参拝記録』の一部分です。次のスライドも同じ『参拝記録』です。当時の賑わいの状況が推測できます。次のスライドをお願いします。これは現在の放光堂ですが、今、工事中でございます。百年前に、この放光堂で遷祖式の儀式が莊嚴に行われたわけです。次のスライドをお願いします。これも遷祖式の光景です。鶴見警察署長や周布神奈川県知事や西園寺公望代理など当時の政治家や著名人が多数列席しています。西園寺公や原敬内相は代理が出席しています。次のスライドは、今までのまとめが書いてあります。先ほど、納富先生がお話されたように遷祖式の中心は「放光堂」で、道元禪師と瑩山禪師の御真牌などが安置されたところです。当日は花火が上がり、新聞社は記念号を発行し、特別記念切符や絵葉書が発売されたりしています。次のスライドをお願いします。これが、現在の神奈川新聞社の『横浜貿易新報』が発行した「總持寺記念号」の予告です。ここには、横浜で初めて鉄の橋が伊勢佐木町入口に造られた「吉田橋開橋式」と「總持寺移転遷祖式」が同記されています。

さて、このスライドは放光堂入口の左に掲げられている説明看板です。この説明板によると、放光堂は「山形県鶴

岡の総穩寺より寄贈され、酒田港から横浜港へ運ばれ、明治四十四年十月に落成した」と記されています。この建物は安政年間に建てられた総穩寺の本堂でした。總持寺の中心になる仏殿は名古屋の萬松寺で刻まれ、材木は飛騨の国有林から得ています。放光堂の移転には、石川禪師は大変気を遣い、東京木場の職人を鶴岡までお送り、津軽海峡が波静かな時を選んで、運ばせたといわれています。遷祖式も次の上棟式も、この放光堂が中心でした。当時は放光堂と跳籠室のみが建っていました。

次のスライドには上棟式の模様が概略されています。遷祖式直後の午後三時に上棟式が始まるという慌しさでした。まず、伊藤平左衛門帝室技芸員が放光堂の高台まで登ります。途中の高台で古式に則った儀式を行います。このスライドには、高台には五色の旗が立てられ、威儀を正した棟梁たちが登る姿が写っています。次のスライドでは、その上棟式の様子を記した『参拝記録』です。次のスライドも上棟式を伝える『横浜貿易新報』の記事です。スライドをお願いします。これは真柱を数人の法被姿の棟梁が担いで登っている風景です。次のスライドをお願いします。高台での儀式の写真です。次の写真とその次の写真も高台における儀式の光景です。次のスライドは『東京朝日新聞』に掲載された放光堂を高台の途中から撮った写真です。

次に、翌日の六日に西有穆山禪師さんの荼毘式が行われました。このスライドは故西有穆山の荼毘式の様子について示したものです。すでに西有禪師さんは、明治四十三年十二月四日に亡くなっており、十二月八日に横浜西有寺で密葬を済ませておりました。これから總持寺で本葬式を行うというので、お弟子さん等がたくさん参列しました。儀式が少し遅れてしまい、午後には強風が起ってテントが飛ばされるといふ事故が起りました。そのことが書かれている新聞記事が次のスライドです。実は、大本山總持寺を鶴見への移転を決定した禪師様である西有穆山師のお墓が、現在何処にあるかわかっておりません。次のスライドをお願いします。西有禪師さんの生前のお姿です。当時の新聞『中外日報』によりますと、古砧壇に埋葬されたとありますが、現在はその辺りに体育館や三松閣や成人学校の建物が建っ

ており、わかりません。この間、横浜元町の西有寺にも行って参りましたが、そこにはお墓はあるものの「お骨はありません」との回答でした。次のスライドをお願いします。これは当日の穆山禅師さんの茶毘式の様子を示したものです。外国大使が仏教のお葬式に大変興味を持たれて、写真を撮りにやってきました。御本山の方に見つかりまして、「どうぞ、こちらへ、こちらへ」と言われて困ったような記事が見られます。その次のスライドをお願いします。

穆山さんの茶毘式の様子を詳しく伝えた新聞記事です。重複しますが、二時頃、放光堂から埋葬場所へ向かおうと出ようと思いますが、強風で出られませんでした。三時になり、やっと行列を組んで出ることができました。夕方に埋葬が行われたとありますから、十一月ですので、もう暗くなりつつあった頃と思われれます。それでは、次のスライドをお願いします。これは西有穆山禅師が總持寺予定地を内密に成願寺の加藤海応住職や栗山泰音師らのご案内で視察している写真です。ここに人力車が写っております。それでは、最後に近い写真をお願いします。この写真は石川素童禅師さんを中心にした御移転の記念写真といわれているスライドです。一方では、この写真は土地の移転が終った記念写真とも言われています。次のスライドをお願いします。今回主に用いた新聞などの資料の一覧です。次も同じです。

これで私の拙い発表は終了です。お聞き頂きありがとうございました。先ほどのお二人の先生と違って、門外漢の私が見た總持寺の移転観です。是非、御移転百年を記念して、總持寺が百年前の賑わいを再び取り戻し、現在の日本人の「心の支え」になって欲しいと願っています。本日はご聴講いただき誠にありがとうございました。